

1. 研究背景・目的

景観緑三法の公布にみるように、美しい国づくりをしていくにあたり、普通の地域において、個性や歴史を生かしていく重要性が認識されつつある。

伝統的建築物群保存地区のように、ある特定時期の歴史的景観が、均質な町並みを保つような街と異なり、一般的な密集市街地というのは、町並みが多様である。まちづくりをしていくにあたり、防災上の安全を考慮して、幅員を拡幅することが多いが、沿道に歴史的な建造物がある場合や、細街路の道路空間自体がもっている親しみのある雰囲気を残したい場合には、別な手法を考える必要がある。しかし、どこにどのような手法を用いるか合意形成をおこなうためには、道路景観の特徴を把握し、そこにどのような価値があるのかを考えなければならないが、長い歴史を重ね変質していったために、景観の特徴が把握しづらくなっている。

本研究は歴史的な背景を整理しながら現状の道路空間に注目することで、道路空間の特徴を明らかにすることを大きな目的とする。

対象地は現在密集市街地で市民参加まちづくりを行っている、山梨県市川大門町中央地区とした。

大きな目的を達成するために、以下を具体的な目的とした。

- ・明治から現在にいたるまでの市街地の変遷を把握する。
- ・歴史を整理し、社会的変化がまちなみに与えた影響を把握する。
- ・道路空間の特徴を抽出する。

2. 密集市街地の現状

全国には整備すべき密集市街地が 25,000ha 存在すると推計されている。しかし、災害の危険性が高い一方で、高齢者世帯、小規模世帯が多く、すみ続けたい意向が高いといわれている¹⁾。また、防災上危険であるという評価と、良い面影があり住みやすいという2面の評価がなされている²⁾。

3. 市街地変遷の把握

最も古い近代測量図である国土地理院の明治 44 年修正の 1/25000 地形図及び市川大門町の昭和 31 年都市計画図を用い、市川大門町の市街地がどのように広がっていったのかを把握した結果を図 1 に示す。さらに、安永 3 年と安政 4 年の絵図を照合した。

これによって、現在骨格となっている道は江戸時代（安永 3 年）に形成されており、街道であった中央通りの東半分の沿道を核として市街化が進行していったことが分かった。

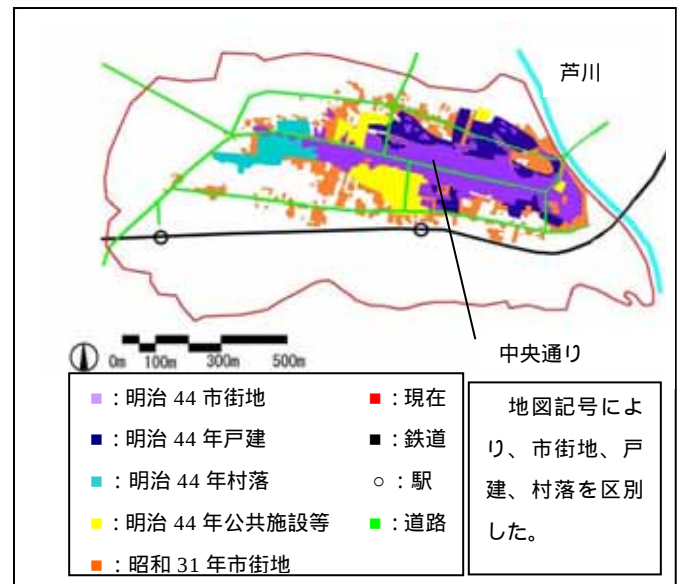


図 1 市街地の広がり

4. 歴史の整理

市川大門町は平安時代の末期より歴史が始まっている。歴史を整理し市街化の経緯を表 1 にまとめた。

表 1 市街化の経緯

	時期
宅地化以前	平安初期は丘に住んでいたが、平安末期に芦川沿いの低地に移住してきた。
骨格の形成	明治 21 年の時点で、中央通り沿線は密集している。基盤となる道は安永 3 年の絵図に見られる。
戦災の影響	被災なし
密集のきっかけ	昭和 30 年代前半主要産業である製紙業が機械化及び技術革新により発達町の経済が活性化峡南地域の中心都市となる
密集箇所	市街地化していた箇所の外側の農地が宅地化
人口のピーク	昭和 30 年代前半その後産業の衰退により減少

これによって市川大門町は江戸時代の市街地を中心として、行政施設の立地や産業の発展とともに広がっていったことが分かった。また多くの土蔵が残っているが、これは天保6年の火事により市街地のほとんど取りが焦土と化したことを契機に防火意識が高まった事と、製紙業という副業をもった裕福な家が多かった事で、当時は高価だった土蔵造りの建物が増えた。

5. 道路の状況

対象地は江戸時代からの街道である中央通りを中心に発達してきたために、南北方向に細街路が発生していった。そして大正時代に入って輸送手段に自動車がいられるようになり、中央通りの交通量が増えてくると、昭和8年頃に南線が、昭和30年頃に北線が市街地を取り巻くように整備された。しかし、市街地内部は細街路が残されたままの箇所が多く、1.8m以下の道もあり、現在建替え困難の問題が起きている一方で、昔から「ひや」と呼んで親しんできたこの細街路は自動車が入ってこられない歩行者のための生活道路として現在も活用されている。図2に現状を示す。

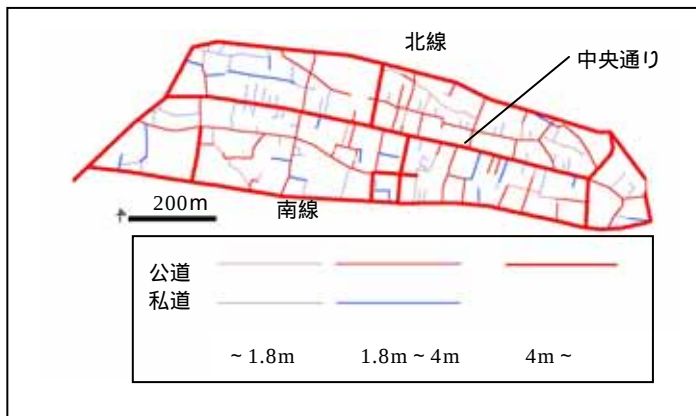


図2 道路幅員現状

6. 市川らしい道路景観

これまでの調査で得られた情報を分析した結果、市川らしい道路空間の景観的特徴を把握した。以下にその結果を示す。

町屋型

明治44年の時点で、密集している地域(図1で「明治44年市街地」)にあり、昔からの町屋や蔵などの建築物が残っている、もしくは、改良されて、現在も使用されている物が多く残されている。そのような場所は建築物のセットバックがなく、囲まれ間が強い。土蔵は夏涼しく、冬暖かいため、住居として改良され、使用された蔵がみられる。建築物が新し

くなっている箇所でも、敷地割りが昔の名残をとどめ、建物や庭の配列に景観の特徴が現れている所もある。しかし、敷地を分割し、建替えを行っているために大きく変質してしまっている箇所もみられる。

中央通り沿いには商店が建ち並び商店街を形成しているが、土蔵や漆喰の大壁造りの建築物に看板をつけただけのものも見られる。

また、自分の家の敷地のように、沿道に様々な物をおいてあり、みちと敷地との境界があいまいな箇所も多く見られる。

戸建型

明治44年の時点では、一戸建てだった所(図1で「明治44戸建」)で、その建物の周りに宅地化が進み、あるいは、広い敷地が細分化されて、密集していった。

骨格となる道路から路地が延びており、突き当たりには屋敷があり、路地の沿道には狭小な戸建住宅があり、特徴的な景観がある。

農地型

以前は農地だった所が宅地化した地域で、和風の戸建住宅が多い。二階建て、コンクリートブロック、セットバックした敷地に植栽という景観が典型である。畦道沿いに宅地化していったために、道路が折れ曲がっていたり、狭いことが多く、また、所々に農地が残っている箇所もみられる。

スーパーや居酒屋といった商店の立地が見られる箇所もあり、これは人口がふえていく時期に密集していった影響だと思われる。

昭和に入ってからの外延部の住宅地化は機械漉き製紙業の発展と共に進行したため、住宅と製紙工場が混在しており、特徴的な景観がある。

7. まとめ

今回の研究により長い歴史を積み重ね、多様な景観を要している市川大門町において、背景を洗いだしながら現状を調査していくことで、市川らしい道路空間の特徴とその歴史的背景を明らかにした。この結果を今後のまちづくりにおいて、方向性を考える材料としていきたい。

【参考文献】

- 1) 都市再生のための防災まちづくり
密集市街地再生戦略 : 防災都市づくり研究会
- 2) 土木学会誌 2001年8月号